

# 喇嘛洞出土の銅鏡をめぐって

森下章司

『三燕文物精粹』には喇嘛洞の出土品として2面の銅鏡が掲載されており、「位至三公”銅鏡」「七乳七雀銅鏡」と名づけられている。この度の日中共同研究において、実物を検討する機会を得ることができた。その結果、双方ともいわゆる魏晉鏡群に属することを確認した。遼寧の地域から近年出土している馬具・帯金具は、古墳時代の日本とのつながりに関連して関心の集まっている重要資料である。銅鏡についても遼寧省ほか中国出土例と日本出土例をあわせて検討し、器物を通じて両者の関係を考えてみたい。

## 1 『三燕文物精粹』掲載の鏡

「位至三公”銅鏡」 図録103

喇嘛洞Ⅱ M314出土。径8.3cm。日本では「双頭龍文鏡」と呼ばれている鏡式である。以下、日本式の鏡式名を用いる。鋳上がりがにぶいせいか文様の表出はあまり鮮明でない。鈕をはさんで縦方向に長方形の枠をつくり、銘文を縦に記す。その脇に龍文を縦方向に配するが、本鏡では龍文表現がいちじるしく簡略化し、唐草文状に線をからませた表現となっている。内区外周には櫛歯文をめぐらす。一段高い外区は素文。

『精粹』でも「半球状鈕，上具長方形穿孔」と述べられているように、鈕を横から見たとき、鏡背面から浮いた位置にほぼ長方形の鈕孔をもつ。福永伸哉が三角縁神獸鏡および魏晉鏡の特徴として注目した要素である(福永1992)。

「七乳七雀銅鏡」 図録104

喇嘛洞村征集品。径14.8cm。割れており、欠失した部分を補修復元してあるが、遺存状況は良好である。銀色の地肌がのぞく部分もある。凹部の地肌には、魏晉鏡や三角縁神獸鏡の残りのよいものにみられるような細かい粒状の凹凸を観察できる。また范ないし型の破損による線状傷が何本もみられる。外区には鋳造後の削り痕がみられるが、本来のものかどうか不明。

日本での鏡式名はないが、ここでは鳥文鏡と呼ぶことにする。円圈座の周囲に有節重弧文の簡略化した線表現があり、そのまわりに斜行櫛歯文がめぐる。内区はまわりに圈線をもつ小乳で七つに区分し、その間に左向きの鳥文を置く。鳥文は頭部が横向きで羽を左右に広げ、ふくらみをもった胴部を表し、尾を簡略に描く独特な表現のものである。内区外周にはS字

形の簡略な唐草文と櫛歯文をめぐらす。外区は凹帯状に中央をくぼめ、珠点入りの波文を表す。鈕と鈕孔については『精粹』で「半球状鈕、上具長方形穿孔」と述べられているとおりである。一方は鏡背面から浮いた位置に隅がやや丸くなった横長の孔があき、もう一方は鏡の背面近くに逆台形形の孔となる。長方形鈕孔のあり方を示す。

その他

遼寧省考古学研究所を見学に訪れたとき、展示室に喇嘛洞出土品として展示されていた銅鏡が1面あった。鏡式は盤龍鏡で、小型品である。鈕孔は四角で鏡背面から浮いた位置にあった。やはり魏晉鏡に属するものと考えられる。

『精粹』および『学報』ではM196号墓から出土した鉄鏡も報告されている。径10.6cm。象嵌などによる文様はみえない。鈕頂が平らな点が特色である。また『精粹』には著名な馮素弗墓から出土した金象嵌入りの鉄鏡も掲載されている。直径21.7cmの大型品。

## 2 銅鏡の位置づけ

喇嘛洞出土の銅鏡2面について、年代の位置づけをおこなう。

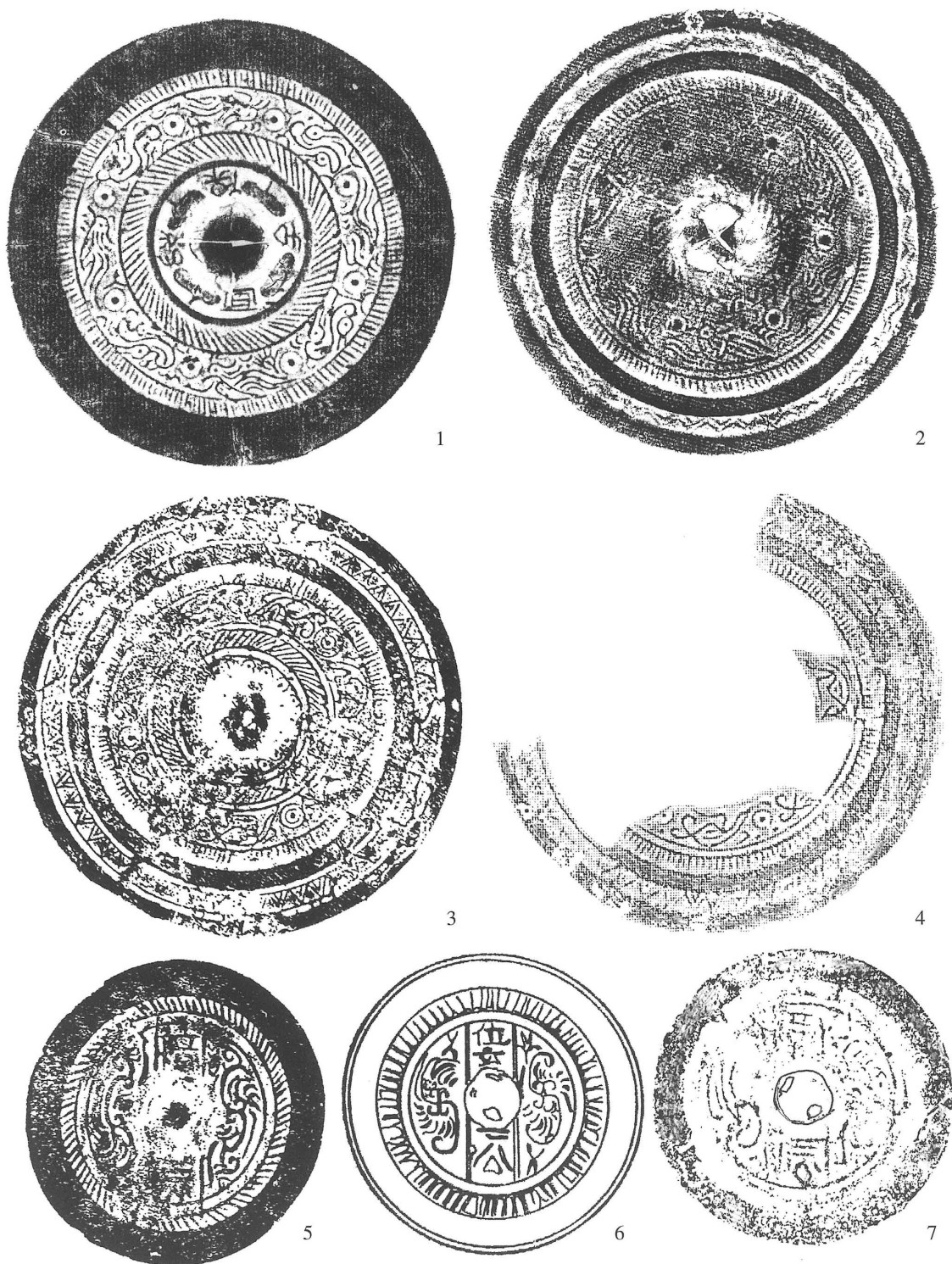
双頭龍文鏡は出土数も多い一般的な鏡式であり、基本的には後漢後期を中心とした時期の製品とされる。喇嘛洞ⅡM314出土鏡は、龍文が簡略化したもので双頭龍文鏡の中でも新しい型式に位置づけられる。この型式の年代をめぐって、日中の研究者からいくつかの見解が出されている。

西村俊範ははじめてこの鏡式を対象に詳しく型式学的な検討を加えた。内区文様の変遷をもとにⅠ～Ⅲ式に分け、年代については出土した墳墓の検討から、「Ⅰ式の初現が二世紀前半、文様変化的に終末期に属するスタイルのⅢ式が東漢代のうちに既に出現していることが確認できた」と言っている(西村1983)。

徐萃芳は双頭龍文鏡のうちの新しい形式のものを位至三公鏡と呼び、その時期が魏晉代にあると述べた(徐1984)。洛陽晋墓をはじめとした魏晉墓で、多数この形式の銅鏡が出土していることを踏まえた見解である。東潮も中国での出土状況から三国・西晉代にも鑄造されていたとして、百濟などを通じて西晉末～東晉初期に日本へ流入したものと位置づける(東1990)。

このように研究者によって年代の開きが生じている点については、喇嘛洞出土鏡のような長方形鈕孔をもつ型式が解決の鍵を握ると考える。この鈕孔形態は魏晉鏡において一般化するものである。双頭龍文鏡Ⅲ式の中でも長方形鈕孔をもつ形式は、魏晉期まで下がる可能性がある。その出現は後漢代であるとして、文様の変化や模倣を通じてさらに生産が継続していたとみる。

双頭龍文鏡は、日本での出土状況に特徴のあることも西村論文でとりあげられている。弥



1. 河北省東道元村 2. 滨北市神明社上1号墳 3. 北京市大营村M4 4. 德島県巽山古墳  
5. 北京市大营村M5 6. 遼寧省十二台郷3号墓 7. 遼寧省昌盛村

图1 鳥文鏡(1~4)·雙頭龍文鏡(5~7)

生時代の遺跡からの出土は、基本的に西村分類のⅠ・Ⅱ式であり、古墳時代前期後半以降ではⅢ式が主となる。中国鏡のひとつの鏡式のなかでの型式変化と、日本の出土遺跡での出土状況がある程度対応する珍しい例である。そうした状況は出土遺跡の年代と鏡の年代とが対応することを示すのであるが、双頭龍文鏡が漢代でその製作を終えていたとすると、日本の古墳の年代との間でずれが発生する。しかし近年、古墳時代前期の実年代観については、3世紀中ごろ～後半に繰り上げて考えられるようになり、鏡の年代に近づいてきた。

西村が触れているように、双頭龍文鏡は華北地域の出土例が多い。遼寧省での出土例もめだつて多く、報告されている例のほとんどがⅢ式である。

遼寧省瀋陽市伯官屯 墓5 径10.8cm

遼寧省遼陽市三道壕村西晋墓 径8cm

遼寧省錦県右衛郷昌盛村墓(長方形鈕孔) 径8.5cm(図1-7)

遼寧省朝陽県袁台子村十二台郷磚廠附近第3号墓 径12.2cm(図1-6)

七乳七雀銅鏡は先にも触れたように、魏晋鏡群に加えることができ、とくにそのうちの規矩鏡群と深い関連をもつ。長方形鈕孔であることに加え、円圏をもつこと、文様帯をもつことなどが鏡群の特徴を示す。

この鏡と同一系列に位置づけられる鏡がある。

河北省涿県南皋店郷東道元村出土 径12.0cm(図1-1)

福岡県宗像郡玄海町田島小学校裏山 宗像大社第二宮社 径15.0cm

湖北省鄂城百子畷 径14.4cm

浜北市神明社上1号墳 径10.7cm(図1-2)

北京市順義県大営村M4 径13.5cm(図1-3)

韓国慶尚北道慶尚郡慶尚邑皇南里古墳 径10.5cm

これらの鏡は、鳥文を主文とすることのほか、波文を用いた外区文様、鈕座に斜行櫛齒文を用いることなど、文様構成や細部の特徴がよく似ている。神明社上鏡、大営村M4鏡は方形鈕孔をもつことも確認される。構成する文様要素をみると、上に取り上げた順に文様数・表現の省略化を認める。その中で喇嘛洞鏡をもっとも古いものとみる。また徳島市巽山古墳出土の鳥文鏡(径14.2cm 図1-4)などは、さらに省略の進んだものと位置づけることができ、洛陽晋墓などでも出土している。

主文様は異なるが「吾作明竟甚獨奇」の銘文をもつことで知られる河北省易県燕下都出土の方格規矩鏡とは、鳥文表現がよく似ている。福永伸哉の示した魏晋の規矩鏡群に属し、三角縁神獸鏡・仿製三角縁神獸鏡と同一の銘文をもつ鏡である(福永・森下2000)。また五島美術館所蔵の景元四年銘変形規矩鏡とは、外区に用いられた凹線、文様帯の唐草文などに共通性をみいだす。

以上のように喇嘛洞から出土した2面の鏡は、細部の特徴などからも魏晋代に位置づけら

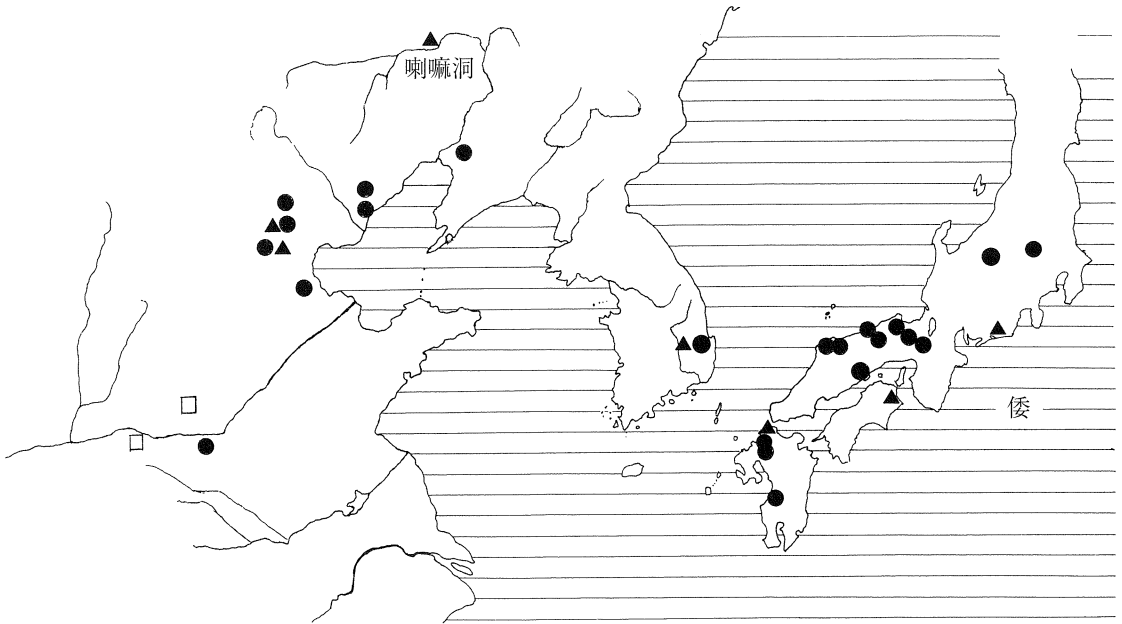


図2 魏晋の規矩鏡(●)・鳥文鏡(▲)の分布

れ、その中でも3世紀におさまる。喇嘛洞の墓地群の中心を占めるとされる三燕代よりもや古い時期のものとなる。銅鏡が副葬されていた墳墓の状況がわからないが、喇嘛洞で報告されている三燕代の墓においては、豊富な副葬品をもつものでもほとんど銅鏡の副葬例が認められていない。喇嘛洞の墓地群の中にこの鏡の年代に遡る墓が含まれていた可能性がある。

### 3 遼寧・河北における銅鏡分布と地域圏

魏晋の規矩鏡や鳥文鏡は、渤海湾沿岸に分布のまとまりを示すことが注目されている(福永1997)。これまで出土例は河北に多く、遼寧省の出土品は遼陽三道壕1号墓例しか知られていなかったが、喇嘛洞の例によって遼西地域にも広がりをもつことが判明した。河北・遼寧一帯に分布域をもつ鏡式とみることができる。その一方大量の出土鏡が報告されている楽浪郡域ではまだ出土例が知られていない。さらに注意したいのは中原地域である。河南省でも魏晋の規矩鏡らしき例が報告されているが、出土例はすくない。

このような鏡の分布状況における地域性が明瞭になってゆくのは、後漢代後半からのことである。双頭龍文鏡や蝙蝠鈕座式の内行花文鏡は華北地域に分布が偏る。神獸鏡・画像鏡は圧倒的多数が長江流域から出土している。

魏晋の規矩鏡・鳥文鏡はその中でもさらに小さな地域に分布が集中するのが特色である。内行花文鏡の中で魏晋鏡に属するものは、同様に華北に分布がまとまるもののその範囲はやや広く、中原地域でも多く出土している。華北地方の中でも鏡式によって分布状況にさらに

違いがあり、製作地も小地域ごとに存在した可能性が考えられる。

一方、こうしたまとまりから遠く離れた地からも関連鏡が出土していることをここで取り上げておきたい。湖北省鄂城の地から出土している内行花文鏡(湖北省博・鄂州市博1986 28)と先にも挙げた鳥文鏡(同14)の2面は、文様の特徴からみて魏晋鏡に属するものと考えられる。いうまでもなく鄂城は三国時代呉の中心地であり、呉の神獸鏡類が多数出土していることでも知られている。この時代の複雑な地域間関係の中で、飛び地的にそうした北方の鏡がもたらされた背景として、政治的な関係の介在を想像させる例である。さらに日本には、中国における地域圏の違いをこえて、さまざまな鏡式がもたらされている。

こうした銅鏡の分布圏の背景を考えてゆくために、この地域の墓制の分布と比較してみる。遼寧省では遼陽一帯に独特の形式の墳墓が発達する。大きな板石を用いて石室を構成するもので、槨室と前廊を基本とし、耳室や回廊などが発達して魏晋代に盛行する(東1993)。壁画墓が多いことも特色である。「同出徐州」銘方格規矩鏡もそうした石室墓から出土したものである。瀋陽周辺や遼東半島では中原その他の地域において一般的な磚室墓が中心となり、板石積み石室などもみられる。朝陽や北票においては喇嘛洞遺跡にみられるように竪穴式の木棺(槨)ないし石槨が三燕期に多数分布する。その始まりは魏晋代に遡りそうである。一方河北省では中原と同じく多室墓形式の磚室墓が中心となる。また楽浪・帯方域では紀年銘磚が知られているように磚室墓が盛行する。銘文を浮き彫りで表した磚の利用はこの地域に特徴的なものである。

このように小地域においてまとまりをもった墓制が展開しており、さまざまな民族・地域政権の入り混じった状況と対応させられる。遼陽周辺の独特の墓制が一部朝陽域や朝鮮半島に伝えられた背景に、亡命や移民などの動きも想定されている。

魏晋の規矩鏡や関連鏡群の分布はそうした地域の枠を超えてまとまりをもつ一方、日本をはじめとして遠隔地にももたらされている。銅鏡の流通において、小集団を越えた結びつきが存在していたことを示す。

## 4 古墳時代の日本との関係

ここで取り扱った魏晋鏡は、日本の古墳からかなり多数出土している。規矩鏡の古い形式に限っても7面の出土が知られており、中国の出土報告例の数に拮抗する状況にある。かなりの数が日本にもたらされていたことになる。また以前に説いたように(森下1998)、日本での出土品は一定形式のものに限られないことも特徴で、一定の長期にわたってそれらの鏡群が継続的にもたらされたことを示している。3世紀中ごろから4世紀はじめにかけて、中国北部で作られた鏡が継続的に流入するような結びつきが発生していた。

3世紀前半までの中国鏡の状況と異なり、これらの鏡群については楽浪郡や朝鮮半島南部

など日本への流入において中継を担った地が明らかでない。中国東北部から直接日本へもたらされたのかどうかはわからないが、3世紀にそうした流入の経路がかたちづくられていたことは興味深い。喇嘛洞からの出土品でとりわけ注目を浴びている帯金具や馬具は、4世紀から5世紀の古墳から類品が出土している。それらについては朝鮮半島からも類品が出土しており、半島を経由して一部が日本に流入したものと考えられる。中国東北部からの器物の流れは、三燕時代よりも前にその萌芽を認める。

#### 参考文献

- 東 潮 1990 「四世紀の国際交流」『古墳時代の工芸』古代史復元7、講談社、pp.167-170
- 東 潮 1993 「遼東と高句麗壁画」『朝鮮学報』149、pp.1-46、(同 1993 『高句麗考古学研究』、吉川弘文館に改題の上所収)
- 河北省文物研究所 1996 『銅鏡紋飾』河北美術出版社
- 後藤守一 1926 『漢式鏡』日本考古学大系第1巻
- 湖北省博物館・鄂州市博物館 1986 『鄂城漢三国六朝銅鏡』文物出版社
- 小山田宏一 1994 「3世紀の鏡」『倭人と鏡』第36回埋蔵文化財研究集会、pp.7-20
- 静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳－資料編－』静岡県文化財調査報告書第55集、静岡県教育委員会、p.178
- 徐萃芳 1984 「三国両晋南北朝の銅鏡」『考古』1984年第6期、科学出版社、pp.556-563
- 秦皇島市文物管理处・撫寧県文物保管所 1992 「河北撫寧邴各庄古墓清理簡報」『文物春秋』1992年2期、文物春秋雜誌社、pp.7-11
- 瀋陽市文物工作組 1964 「瀋陽伯官屯漢魏墓葬」『考古』1964年第11期、科学出版社、pp.553-557
- 程長新・程瑞秀 1989 『銅鏡鑑賞』北京燕山出版社
- 田立坤 2002 「袁台子壁画墓の再認識」『文物』2002年第9期、文物出版社、pp.41-48
- 東北博物館 1955 「遼陽三道壕両座壁画墓の清理工作簡報」『文物参考資料』1955年第12期、中國古典藝術出版社、pp.49-58
- 西村俊範 1983 「双頭龍文鏡(位至三公鏡)の系譜」『史林』第66巻第1号、史学研究会、pp.95-115
- 原田大六 1961 「十七号遺跡」『続 沖ノ島』宗像神社復興期成会、p.91
- 傅俊山 1987 「遼寧錦県右衛郷昌盛漢墓清理簡報」『北方文物』1987年第4期、《北方文物》雜誌社、pp.23-25
- 福永伸哉 1992 「規矩鏡における特異な一群－三角縁神獸鏡との関連をめぐって－」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集、pp.249-256
- 福永伸哉 1996 「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』第30号史学篇、大阪大学文学部、pp.1-22
- 福永伸哉 1997 「三角縁神獸鏡製作地の研究」『リポート』41号、山陽放送学術文化財団、pp.4-8
- 福永伸哉・森下章司 2000 「河北省出土の魏晋鏡」『史林』第83巻第1号、史学研究会、pp.123-139

- 北京市文物工作隊 1983 「北京市順義縣大營村西晉墓葬發掘簡報」『文物』1983年第10期、文物出版社、pp.61-69
- 森下章司 1998 「古墳時代前期の年代試論」『古代』第105号、早稲田大学考古学会、pp. 1-28
- 森下章司 2003 「山東・遼東・楽浪・倭をめぐる古代銅鏡の流通」『東アジアと『半島空間』－山東半島と遼東半島－』、思文閣出版、pp.115-125
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004 「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」『考古學報』2004年第2期、中国社会科学院考古研究所、pp.209-242
- 遼陽博物館 1990 「遼陽市三道壕西晉墓清理簡報」『考古』1990年第4期、科学出版社、pp.333-336・374
- 李宇峰 1986 「遼寧朝陽兩晉十六国時期墓葬清理簡報」『北方文物』1986年第3期、《北方文物》雜誌社、pp.23-26・71